

3 中間育成試験

佐々木鉄郎[※]・武田 雷介^{※※}

ホタテガイ稚貝の中間育成の主な目的は、夏期の底生環境の悪い期間を避けて人工管理し、放流用の健苗を育成することにある。最近はこのほかに養殖のための種苗として、更に早期成長を図ることも、目的の一つになってきた。

昨年度までの中間育成試験により、放流のためのもの、ネット当り育成密度がつかめたが、今年度は、更に稚貝の早期成長促進を図るために適正収容密度を知るための試験を行なった。

試験場所

東津軽郡平内町茂浦地先の水産増殖センターの試験用筏を使用（水深4 m）

試験方法

容器はパールネット（目合い6 mm）を使用

収容個体数はネット当り25, 50, 100, 125, 200個の6種類に分け、2組を垂下した。そのうち1連は10月21日に収容個体数を2分の1に減量して収容し、それぞれの成長比較をした。

結果および考察

測定回数は9月から4年3月下旬までに6回実施した。その結果は第1表のとおりで、収容個体数の多寡と成長の良否は相関がある。昨年度の結果でも収容個体数が125個以下のものは10月下旬には平均殻長3 cm以上となった。本年度も同様に10月下旬には殻長3 cmに達したが成長のばらつきが大きく48%が3 cm以下であり、全体が3 cmになったのは12月下旬であった。これに比べて100個収容のものは11月下旬の結果では92%のものが3 cm以上になった。以上のことから考えて、採苗器より稚貝を採取し中間育成に移す時点で稚貝を適正収容することは、その後の成長促進に好ましいことである。当初稚貝の採取作業を進歩させるために収容個体数を過量にしているが、このような場合にも8月下旬の高水温時を経た後、早目に適量分散作業を行なう必要がある。

生残率は今年度の試験では最低が85%で殆んどのは90%以上となり、昨年度の最高86%と比べるとかなりの好成績であったが、これは収容密度による差と考えられる。

※ 佐々木鉄郎：現 青森県主任水産業改良普及員 川内町駐在

※※ 武田 雷介：現 兵庫県水産業改良普及員 州本農林事務所駐在

第1表 ホタテガイ稚貝中間育成試験測定結果 (殻長cm 重量g)

収容個数個 測定月日	No. 1						No. 2					
	25	50	100	125	150	200	12	25	50	60	75	100
43. 9. 13	平均殻長2.20 (1.70~2.56)											
" 10. 21	3.37	3.14	2.99	3.08	2.91	2.77	No.1と同数収容のものを10月21日に上記のように1/2に減量して収容					
" 11. 22	3.76	3.76	3.39	3.34	3.07	3.01	4.15	3.89	3.53	3.51	3.33	3.10
" 12. 24	4.44	4.30	4.13	3.80	3.48	3.11	5.14	4.77	4.35	4.27	4.03	3.94
44. 1. 22	4.60	4.45	4.21	3.89	3.60	3.52	5.33	4.99	4.44	4.49	4.14	4.03
" 3. 20	5.10	5.00	4.70	4.50	4.10	3.80	6.30	6.00	5.40	5.10	4.90	4.60
最大殻長 44. 3. 20	5.9	5.8	5.4	5.4	4.6	5.0	7.4	6.8	6.4	6.1	6.6	5.3
最小殻長 44. 3. 20	4.4	3.6	3.8	3.5	3.2	2.3	5.5	5.5	4.7	4.1	3.8	3.6
増殻長 9.13~3.20	2.90	2.80	2.5	2.3	1.9	1.6	4.1	3.8	3.2	2.9	2.7	2.4
平均重量g 44. 3. 20	16.5	13.2	10.9	10.4	8.2	7.5	29.2	25.1	18.0	15.1	13.8	11.3
増重量g 9.13~3.20	15.1	11.8	9.5	9.0	6.8	6.1	27.8	23.7	16.6	13.7	12.4	9.9
生残率%	96	92	95	96	97	100	92	92	90	97	97	85